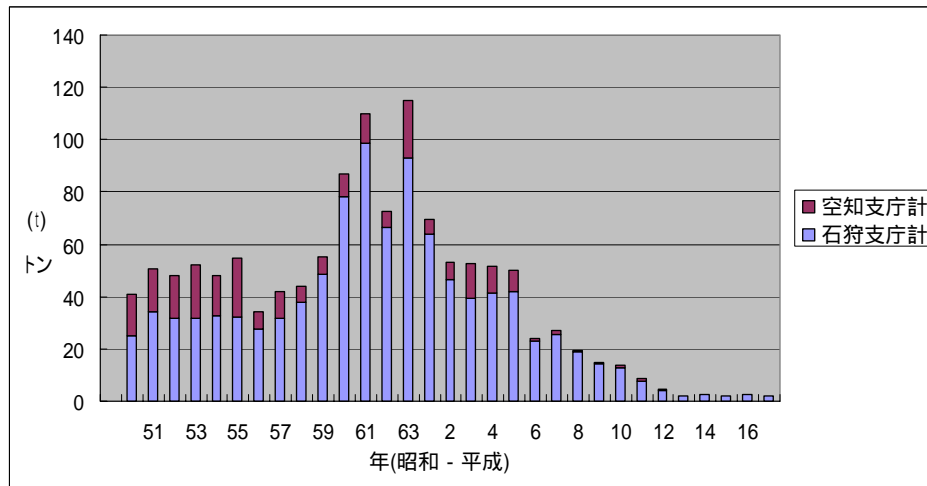


6 カワヤツメ資源の減少

1) 減少の状況

石狩川水系では、カワヤツメは明治 30 年代から、健康食資源や流域の食料として捕獲されてきました。

江別だけでも年に 180 トン(昭和 34 年)も捕獲されたことがありましたが、昭和 50 年以降は石狩川水系全体で 40 トン前後に落ち、再び昭和 63 年の 132 トンをピークにして、現在までどんどん減ってきて、平成 14 年以降は 3 トン以下まで激減しています。この年以降、江別市のヤツメ祭りが中止に追い込まれてしまいました。

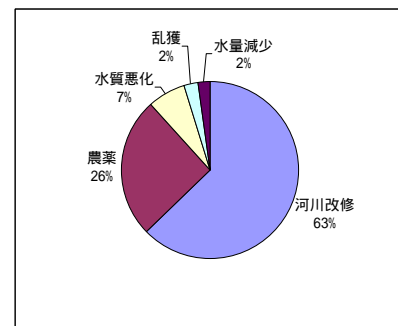


石狩川におけるカワヤツメ漁獲量

2) 減少の原因と考えられていること

- (1) カワヤツメが上流や支流に上ることのできなくなっていること。

本流や支流に設けられている大小のダムや水門などが、カワヤツメがそれより上流に上って産卵することをはばんでいます。また、魚を通すための魚道が設けられていても、多くの場合、カワヤツメが乗り越えることができない段差(だんさ)があります。



減少したと考える原因

(現地アンケート調査平成17・8年)

- (2) カワヤツメが産卵する場所が少なくなっていること。

産卵は、大きな淵につながる平瀬(ひらせ)で、適当な大きさの石のある川底で行われます。本流や支流の改修によって、淵や平瀬の形態が不明瞭になったことで、産卵できる場所が少なくなっています。

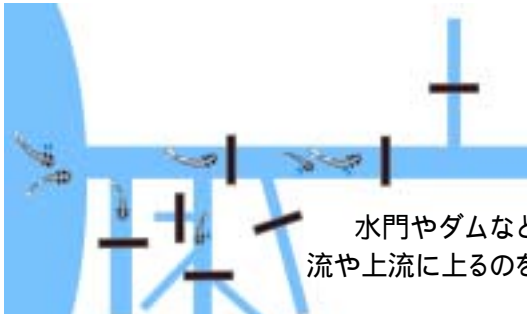
- (3) 幼生のすめる場所が少なくなっていること

川が直線に改修されたり、岸辺が護岸のためコンクリートで固められたりして、幼生の生育に必要な泥や有機物のたまり場が少なくなっています。

- (4) そのほか。

上流の森林の伐採や開発によって水量・水温・水質などの変化や、農薬の入った農業用水の流入によってカワヤツメの幼生などがすみにくくなっています。また、海での生活環境も大きな変化が生じていること、およびこれまでの捕獲が多すぎたためとも考えられています。

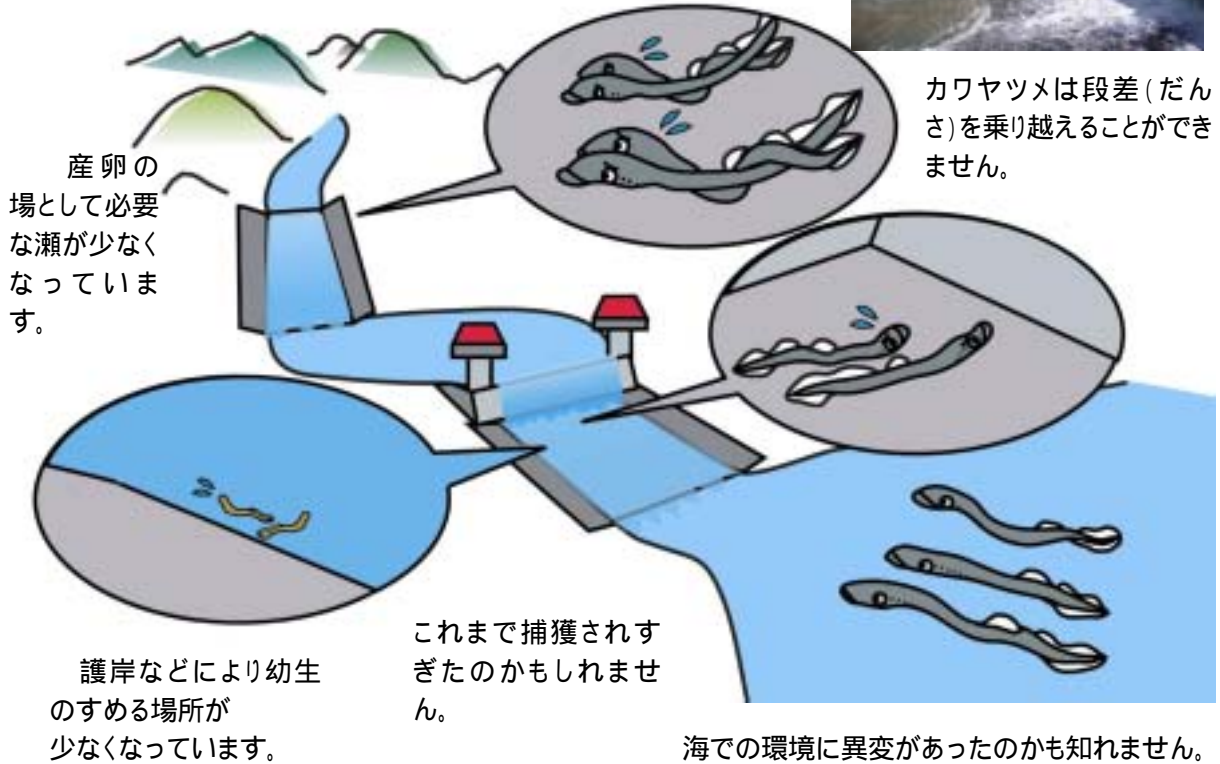
3) カワヤツメの生活をはばむもの



水門やダムなどはカワヤツメが支流や上流に上るのをはばんでいます。



水門



垂直な障害物があるとカワヤツメは進めません。



魚道の中の壁を越えることができない



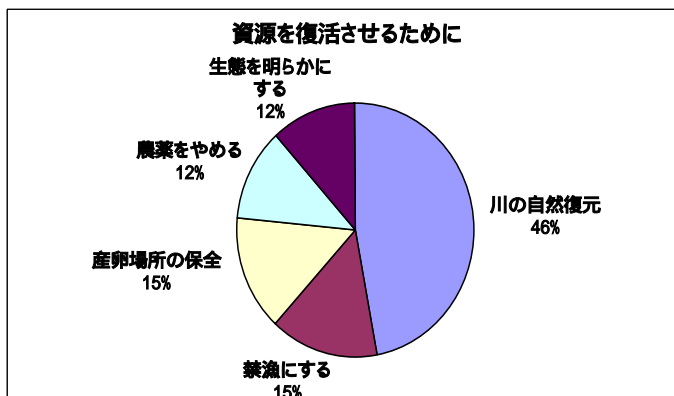
カワヤツメが利用できない魚道

石狩川のほとんどの支流では利水や治水のために川を横断する施設が設けられています。これがカワヤツメの移動をはばんでいます。魚道があっても多くが移動の困難なつくりになっています。また、これまでの河川改修によって自然の流れが失われ、川底も礫(れき)が流出し、産卵の場として必要な瀬がなくなっています。

7 カワヤツメの復活にむけて



聞き取り調査(妹背牛町)



グラフは、石狩川のカワヤツメ資源を復活するために必要なこと、江別・空知で実際に漁をしていた人たちにお聞きした結果です。

1) 河川環境の改善が必要です。

できる限り自然の流れに戻す。

水が自由に動き、入り江、瀬、淵などの変化にとんだ河川環境を取り戻す。

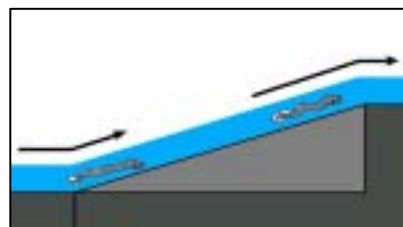
移動通路を確保する。

カワヤツメが上流や支流に上るのははばんでいるダムなどに移動可能な構造の魚道を設置する必要があります。

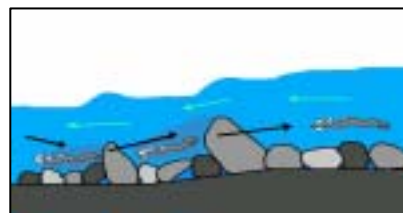
農業用水用の水門を閉める時期をカワヤツメが上る時期に合わせて調整するとともに水門を開けた時にカワヤツメが上ることをはばむ段ができないように改良する必要があります。

産卵場を確保する。

上流や支流を大きな淵や瀬ができるような河川形態にする必要があります。



カワヤツメが上れるように段を改良



自然の流れでは流れの速さがゆるくなり、上ることができるようになる。



産卵場

植物におおわれた幼生に良好な育成場

幼生の生息場所を確保する。

孵化してから流れによって流され、下流へゆっくりと降下し新鮮な泥の中で成長できるようにする必要があります。

(河川を蛇行させ、入り江をつくる、波による川岸の崩壊を防ぐ、増水時に水がかぶり、腐った泥が洗い流されるようにする。)



水中の様子

親魚のかくれ場をつくる

流れをゆるやかにしたり、倒木や沈木(ちんぼく)ブロックなどを積んだりして、カワヤツメが休んだり、かくれたりできるようにする必要があります。このような工事を水制工(すいせいこう)といいます。



2) 人工孵(ふ)化と放流の技術開発。

捕獲したカワヤツメから卵を採取して孵化させ、生まれた幼生を石狩川に戻す試みが行われています。



江別漁協で行われた
増殖事業(採卵の様子)

北海道立水産孵化場で行
われている人工孵化試験



孵化させた幼生の群

3) 漁の調整。

カワヤツメが川に上ってくる時期や産卵時期には休漁するなどの調整が必要です。現在江別及び石狩湾漁業協同組合ではカワヤツメが春に上ってきて産卵する時期には休漁しています。

4) 調査・研究の推進。

海でのカワヤツメの生活

海でどのように暮らしているのか基礎的なデータが必要です。海域でのサケ・マス資源の増減もカワヤツメの資源量に関係しているとも考えられています。

川でのカワヤツメの生活

川でどのように過ごしているか食性などの基礎的なデータが今なお不足しています。

カワヤツメの増殖技術

人工孵化や放流、幼生の保護技術などを確立し、実施の仕組みをつくる必要があります。

資源回復に向けた河川の改修

砂防や洪水対策、農業用取水と川づくりとの調整や適正な河川計画のあり方、移動施設の改良方法、産卵場、幼生生息環境を創り出す技術などが必要です。

資源管理

科学的な管理手法(漁獲制限など)を確立し、資源の持続を図る必要があります。

モニタリング

遡上の状況、漁獲の状況、施設改善の状況、幼生の生息状況や産卵場の状況などを継続的にチェックし、資源管理に役立てていく必要があります。



5) 多くの人の理解と協力。

カワヤツメを含む地域の生態系の保全と川を源とする文化の大切さに理解を広げる必要があります。

解説(専門コーナー)



1) 石狩川ヤツメ文化保全再生事業

石狩川水系のヤツメ(カワヤツメのことをヤツメと呼ぶ)資源量が激減する中、漁業者やヤツメ利用者、市町村などから、何とか資源を増やしていこう、ヤツメの文化を守っていこうという機運が芽生えてきた。そこで立ち上げられたのが、北海道の石狩支庁、空知支庁が主体となって、平成16年度から平成18年度までの3カ年で取り組むこととなった「石狩川ヤツメ文化保全再生事業」である。

事業目的については、ヤツメ資源の回復はもちろんのこと、地域に重要な貢献をしているヤツメの食や祭りなど文化そのものの保全・再生をも目指していくこととした。それが、事業名に強く表れている。

さて、ヤツメの資源を回復するためには、河川をヤツメが生息するのに適した環境にしていけることが必要である。石狩川水系は、本来、360km 長さを誇っていたが、度重なる洪水による人命・財産の喪失に対処するため、河川の直線化や浚渫などを進め、今では、100km も短くなってしまった。さらに堰堤なども数多く設置されている。サケ・マス類のように川と海を行き来するものは、意外と多く、ヤツメもその一種であるが、ヤツメの落差を乗り越える能力は、サケ・マス類よりはるかに劣る。魚道が設置されている堰堤も多いが、ヤツメのような遊泳能力の弱いものにまで配慮されているかは疑問である。また、これらの堰堤が、ヤツメの行く手を阻むだけでなく、容易に採捕することができる漁具としての機能を果たしていることも事実である。いずれにしても、河川工事は、北海道に住む人々にとって必要でかつ重要な事業であったが、ヤツメを始めとする水生生物の立場から見れば、結果的に生息の場を狭め、生息環境を悪化させるものであったことは否めない。

これらのことも勘案しながら、事業の具体的内容を定めるために、次の3項目の柱(目標)を立てた。

ヤツメの産卵や幼生生息のための好適環境を調査・確認し、環境整備の検討材料とすること。

産卵親魚の確保(資源管理)を行うこと。

人工ふ化技術開発など積極的な増殖技術の開発をすること。

また、これらの取り組みについて、関係者はもちろんのこと多くの道民に理解を深めてもらうことが重要であると考えた。

これらのことから、まず、「資源増殖技術検討会」を漁業者、研究者(大学、水産ふ化場など)、河川管理者(河川工事の担当者)をメンバーとして組織し、生理生態の調査、漁業者等に対するアンケート調査、人工ふ化などの増殖技術の検討、河川工法の検討(材料の提示)、事業の全体的なコーディネート等を行うこととした。

平成16年度は、既存資料の収集等で終わったが、平成17年度からは、産卵床の確認と好適産卵条件の推定や幼生の好適生育条件の推定などの調査が本格的に行われてきている。なお、平成18年には、幼生の食性と河川の遡上阻害要因についての調査を予定し、平成17年度調査結果と併せてヤツメの資源回復に必要な好適環境条件、つまり、ヤツメにとって好適な河川のあり方について提示できるようにしたいと考えている。

また、ヤツメの漁業者、採捕者を対象に「資源管理技術検討会」を開催することとし、平成16年度においては、ヤツメがおかれている現状を明らかにして、資源管理の重要性と本事業の必要性について理解をいただいたところであり、今後は、科学的なデータに基づいた資源管理の具体的手法について検討・協議していくこととしている。

ヤツメをとおして、ヤツメ関係者、河川管理者、一般道民が人にも生き物にも優しい河川のあり方について理解を深めていくことができれば素晴らしいことである。山(森)と海をつなぐ大動脈である河川が息を吹き返し、地域の振興が図られるのであれば、その糸口となるだけでも大きな事業効果ではないだろうか。

石狩川の風物詩であるヤツメ漁業やヤツメ料理などの食文化が将来にわたって継続されると共に、江別市の「八つ目祭り」が近いうちに復活することを願ってやまない。

(石狩川水系のカワヤツメ関連資料から抜粋)

2) ヤツメウナギは3億6000万年前から、かわらぬ姿で生きているらしい。

脊椎動物のほとんどはあごを持つが、ヤツメウナギ類にはあごがありません。あごのみならず、うろこも持たないことから、ヤツメウナギ類の化石は判別されにくく、その進化のようすは明らかにされてきませんでした。

南アフリカ、ウィットウォーターズランド大学のゲス博士らは、3億6000万年前の古生代デボン紀末の地層から、ウナギの祖先の化石を発見しました。この化石の特徴は大きな吸盤、口の周囲にある角状の歯、そしてバスケット状のえらの骨などで、現生のヤツメウナギによく似ていたといえます。これまでみつかったヤツメウナギの最古の化石は、デボン紀の次の時代にあたる石炭紀のものでした。しかし今回の化石の発見により、ヤツメウナギは石炭紀より前の、デボン紀末には生存していた可能性が出てきました。

これらの調査結果から、ヤツメウナギはデボン紀末以前に進化をとげ、それ以降から現世まではずっとかわらぬ姿で生きのびてきた、と博士らは考えています。（2006・10・26 Nature誌から）

3) カワヤツメの名前(参考 2002 日本の淡水魚、改訂版 山と渓谷社)

和名：ヤツメウナギ、ヤツメとも呼ばれます。

アイヌ名：ウクリペ (食べる気になれぬ・魚 長万部)

英語名：Japanese lamprey

学名：*Lethenteron japonicum*

4) 分類(参考 2000 . 日本産魚類検索：全種の同定、第二版 東海大学出版会)

動物界・脊索動物門・脊椎動物亜門・無顎口上綱(円口類ともいう)・頭甲綱(円口綱)
・ヤツメウナギ目・ヤツメウナギ科・カワヤツメ属・カワヤツメ(種)
魚類の中でもっとも原始的な位置づけにあります。

5) 分布

世界の分布：スカンジナビア半島東部～朝鮮半島、アラスカ

日本の分布：北海道と島根県以北の日本海側と茨城県以北の太平洋側

6) 形態



7) カワヤツメの産卵と幼生について

昭和 58 年度石狩川下流内水面漁撈調査報告書 - 生物環境編 - (北海道栽培漁業振興公社)によると、昭和 56～58 年の間では 9 月になると下流部(現石狩市周辺)で漁獲されるようになり、11 月にはさらに多く捕れるようになる。この地域での漁獲は 3 月頃まで続き、その後、次第に漁獲は減少して 6 月には漁獲が見られなくなる。上流の江別市付近では漁獲され始めるのはやはり 9 月であるが、12 月頃に本格的になり、途中 1 月には氷が流下するため漁ができなくなるため漁獲量がなくなる。その後 2 月になって漁獲量は多くなり、6 月まで漁のある状態が続く。

このことから、海からの遡上は秋 9 月ころから始まり、11～12 月まで増加する。その後は河川内で滞留するカワヤツメもあわせて漁獲されることも考えられることから、いつまで海から新しく遡上してくるものかは明らかではないが、徐々に収束するものと考えられる。

カワヤツメの産卵は河川の中流域で行われる。千歳川支流の漁川では 5 月に入ると川底に吸い付いている親魚を見ることができる。これに対し、空知管内の尾白利加川では融雪増水の治まる 6 月から産卵が始まり、年によっては 7 月におよぶこともある。

尾白利加川で観察したカワヤツメの産卵場は水深 30～60cm、表面流速 60～100cm/秒の深瀬に形成されていた。ただし、カワヤツメが産卵する底層の流速は表面流速の三分の一程しかない流速であった。産卵は上記の水深や流速の範囲内で行われていたが、深い瀬から浅い瀬へ移行する場所に産卵床が多く形成されることも特徴的に観察された。

産卵床は上流側に直径 10～20cm の石があり、これに吸い付くことによって体を保持している。その石の下流側を長さ 40～50cm、幅 20～30cm にわたって表面の大きな石を尾部で跳ね飛ばしたり、口で吸い付けて移動し、直径 2～3mm の細かい砂利を露出させる。この部分に卵を産みつける。

カワヤツメ親魚から産み出され、精子と受精した卵は弱い粘着性を持っているので、一部は砂利に付着するが、そのまま下流に多く流されるのも観察されている。また、砂利に付着した卵もその後粘着性が弱まるので、多くが卵のまま下流に流されていることが予想される。

卵から生まれたカワヤツメはアンモシーテス幼生と呼ばれ、泥中に生息している。泥を消化管に取り込み、泥中に含まれる植物の細片や水生昆虫の遺骸の破片を消化吸収して体を形作っていると考えられている。石狩川水系では体長のモードから 3～4 年級が混棲していると考えられている。アンモシーテス幼生では目も皮下に埋もれ、ヤツメウナギ類の特徴である他の魚類に吸い付くための口も泥を取り込むための穴に過ぎない。石狩川ではカワヤツメのアンモシーテス幼生の他にスナヤツメやシベリアヤツメのアンモシーテス幼生も生息している。これらの生態的や形態のおもな特徴は次のとおりである。



カワヤツメの産卵



卵



孵化後の幼生(枠は5mm方形)



泥にもぐりこむ幼生

	カワヤツメ	シベリアヤツメ	スナヤツメ
形態的特徴	尾鰭と第二背鰭の先端は黒く着色する。 最も尾部寄りの外鰓孔の後端から肛門までの筋節数は68 - 77。 筋節幅は狭い。 筋節幅の割合 61.5 - 75.8	尾鰭の先端のみ、黒く着色する。 最も尾部寄りの外鰓孔の後端から肛門までの筋節数は65 - 73。 筋節幅はカワヤツメとスナヤツメの中間。 筋節幅の割合 77.2 - 78.2	尾鰭と第二背鰭の先端は着色し 最も尾部寄りの外鰓孔の後端から肛門までの筋節数は57 - 65。 筋節幅は広い。筋節幅の割合 80.0 - 100.6
生態的特徴	一度降海して、遡上、産卵する。	淡水生活のみ。	淡水生活のみ。

*1)筋節幅の割合 = ((筋節長) × 104) / (全長) / (筋節数)

筋節長 = 最も尾部寄りの外鰓孔の後端から肛門までの長さ

アンモシーテス幼生が全長 120 ~ 150mm になった秋、10 月ごろに親と同じ小型の体に変化する。この変化を「変態」という。すなわち、体色はそれまでの茶色から背中側が濃い青で腹側は銀白色となり、口は他の魚類に吸い付いて体液を吸収できるように丸く、歯を備えたものになる。外鰓孔もはっきりと開口して鰭も親と同じようになる。変態した後、川で冬を越して、翌春、海に降りて行くと考えられている。

8) 人工増殖、放流

ヤツメの人工増殖の試みが始まったのがいつからかは明らかではないが、江別漁業協同組合では昭和 51 年から、ワカサギのふ化事業を模倣して採卵受精した卵をシュロ盆に付着させ、これを石狩川に吊して、ふ化事業を行ってきた。また、それと並行して、6 月 1 日から 8 月 20 日までを休漁期とし、繁殖保護を行っている。

水産孵化場では本事業において受精率を高めて、効率的にふ化事業を進めるための調査研究を行っている。カワヤツメの卵は他の魚類と異なり、むしろカエルやイモリなどの両生類に似た全割卵(卵全体が細胞分裂する)であり、他の魚類の知識が簡単に通用しない困難さがあったが、親魚の成熟度、卵の浸っている液(体腔液)の量、受精卵の粘着度などが受精率に関係することがわかった。受精率の高いものは当然ながらそれらの卵から生まれてくるアンモシーテス幼生も多く生まれて来て、平成 19 年には江別漁業協同組合自らが採卵、受精した卵をふ化させ、アンモシーテス幼生として石狩川に放流することができた。将来は餌を与えて変態後まで飼育し、海に降りる直前に放流することも考えられる。



産卵(水槽実験)

河川改修などにより、アンモシーテス幼生の生育する場所の多くが失われている現状ではこの手段は有効であるが、事業として運営するには必要な施設の建設費と運営経費が妥当なものであるかを検討しなくてはならない。

また、小さい水槽中でも砂利を引いて条件を整えれば産卵に至ることが確かめられたことから、人工産卵河川を造成して効率的に産卵させることが可能であろう。さらに北海道栽培漁業振興公社ではカゴの中に植物を詰めて、アンモシーテス幼生生育場の造成を試みているが、これらの手段を組み合わせることで、失われた産卵場や生育場の補完に貢献することができるかも知れない。



生まれたばかりの幼生

9) ドウ漁操業概要

流れの緩やかな水深0.5～1.2mの軟泥場が良い漁場となっている。

産卵(4～8月)のため川をそ上するのを漁獲します。夜行性のため月夜は漁獲することがほとんどない。

川幅と水流によって異なるが、河口付近では胴数30個をもって1放しとし、3箇所敷設し90個程度を使用するものが多い。一日の操業回数は普通1～2回、水流の急な場合は2～4回操業する。漁期9月～翌年5月ドウを敷設するには、はじめに川岸の立木や杭から長さ24尋ほどの幹縄を対岸に向けて張り、碇でとめる。幹縄にはおよそ半分のところにタブと称する結び目があり、ここからさらに次の幹縄が延ばされ碇で固定される。このようにして10本ほどの幹縄が次ぎ次ぎと接続され、最後のタブに長さ12mほどの浮標綱が結ばれる。ドウは股とよんでいるタブとタブの間に3～4個取り付けられる。したがって、10本の幹縄であれば30～40個のドウが結ばれることになり、これを1放または1配とよんでいる。

新しい胴は浮力が強いので最初は小石(200g程度)を、5～6個入れ浮力が減るに従って減らしてゆく。その後胴が重くなると、ガラス玉、1升ピンなどを付けて浮力を補っている。操業時は風下から引き揚げを行わないと、胴が船底にかくれ作業が困難になる。

漁獲された獲物は、川の中に設置されたコンテナ(プラスチック製の生け簀)に入れて浮かしておき、仲買人が来るまで生かしておく。野幌の料亭、北見の置戸にある製薬工場などに買い取られていく。工場では、ヤツメの油を絞って薬をつくる為、かなり大量の仕入れを行っている。また、全国の大学などから、医学的研究用の注文を受けることも多い。

ヤツメは本州で激減しており、非常に希少価値が高い。漁師による自家消費はほとんど無く、疲れたら食べる程度である。目が悪い人や病人に食べさせるなど、薬膳食的な扱いをしている。

実際に舟を出して操業しているのは、13隻いるが、現在の水揚げ量的にヤツメ専門で生計を立てる事は不可能である。

利用されるドウには、茅ドウと網ドウがある。自分で作るドウには漁師ごとの個性があって、慣れた者なら上から見分けがつく。使用は網ドウの方が主体で、餌を入れず、川の中程に浮かせて設置するが、その為には川にある程度の流れが必要となる。現在では上流に設置されたダムにより、流れのない時期などが時おり存在するため、漁協から適量を放水し、流れをつくるよう要請している。

河川の改修で流路がまっすぐに直されてしまった為、増水すると腐泥(ふでい)、砂泥(さでい)が減ってしまい、ヤツメの幼生の生息環境が破壊されてしまう。現在、支流の方に生息環境が残っている程度ではないかと言う。

江別漁協では、石狩川開発建設部と協議し、環境共存型の河川法へと大幅な改正を、ここ数年推進してきた。ようやく石狩川開発も、自然保護型に変わりつつあると言え、石狩・空知・上川地垣の漁業者らなど関係組織の結合協力体制が必要、という事である。

(石狩川水系ヤツメ関連資料 江別での聞き取りおよび現地調査 北海道大学文学部 池田雄輝による)



江別ヤツメウナギサンバ

斎藤賢一 作詞 作曲

- 1 朝の早よから ゴムカッパはいて ハヤツメちゃんハヤツメちゃん
 野良着姿で コラ ほうかむり ハヤツメちゃんハヤツメちゃん
 親爺どこさ行く かや胴をかつぎ
 石狩川に コラ やつめとる ハヤツメちゃんハヤツメちゃん
- 2 ど舟こく手に 親爺もおどる ハヤツメちゃんハヤツメちゃん
 川は沸き立つ コラ 手もおどる ハヤツメちゃんハヤツメちゃん
 舟もおどるよ やつめも踊る
 かやどひく手にコラ 目もおどる ハヤツメちゃんハヤツメちゃん
- 3 今日も大漁だ 陸また繁盛 ハヤツメちゃんハヤツメちゃん
 やつめとる手にコラ 気もはずむ ハヤツメちゃんハヤツメちゃん
 朝の出舟も 帰りの舟も
 やつめ囃しで コラ 浮かれだす ハヤツメちゃんハヤツメちゃん
- 4 わしもあなたも やつめもおどる ハヤツメちゃんハヤツメちゃん
 やつめ祭りで コラ 手も弾む ハヤツメちゃんハヤツメちゃん
 江別よいとこ 一度はおいで
 やつめうなぎでコラ もて流行る ハヤツメちゃんハヤツメちゃん



本誌の原稿は主に再生事業などによって報告された次の資料によっています。

- 石狩川水系ヤツメ関連資料(2006・7 北海道)
 - 石狩川水系のスナヤツメ文化を未来へー石狩川ヤツメ文化保全再生事業 北海道石狩支庁経済部水産室長 渡辺剛樹
 - ヤツメウナギの雑誌長 - 北海道立水産孵化場内水面資源部長 今田和史
 - 平成 17 年度石狩川ヤツメ文化保全再生事業報告書 北海道立水産孵化場内水面資源部
 分類、生態、漁業、アンモシーテス幼生生息密度の経年変化、アンモシーテス幼生の生息密度と環境要因、カワヤツメ産卵場の環境、カワヤツメの産卵行動(室内での行動観察)、安定同位体比を用いたカワヤツメ海洋生活の推定、啓蒙活動への参加
 - 「川本来の姿」ヤツメウナギ類の生態をとおして河川環境を考えるー 流域生態研究所 妹尾優二
 - 「カワヤツメの産卵・生息環境に関する研究」北海道工業大学 環境デザイン学科 柳井清治
 - 石狩川下流部ヤツメ幼生関連調査 石狩川開発建設部
 - 石狩川水系のカワヤツメ資源に関する調査 捕獲状況現地聞き取り調査 酪農学園大学環境システム学部地球環境保全学研究室
 - 北海道石狩川におけるヤツメウナギ魚の人類学的研究 北海道大学人類学歴史・人類学専修過程北方文化論コース 池田雄輝
- HOCTEC REPORT-川づくりのための魚類ガイド 2001 財団法人北海道建設技術センター
- ヤツメ幼生場創出試験 2006.8 北海道栽培漁業振興公社
- 野幌丘陵とその周辺の自然と歴史 山田 健 1981 北海道開拓記念館研究報告第6号
- 分類アイヌ語辞典 知里真志保 1976 など。



編集・執筆

酪農学園大学環境システム学部地球環境学地球環境保全学研究室

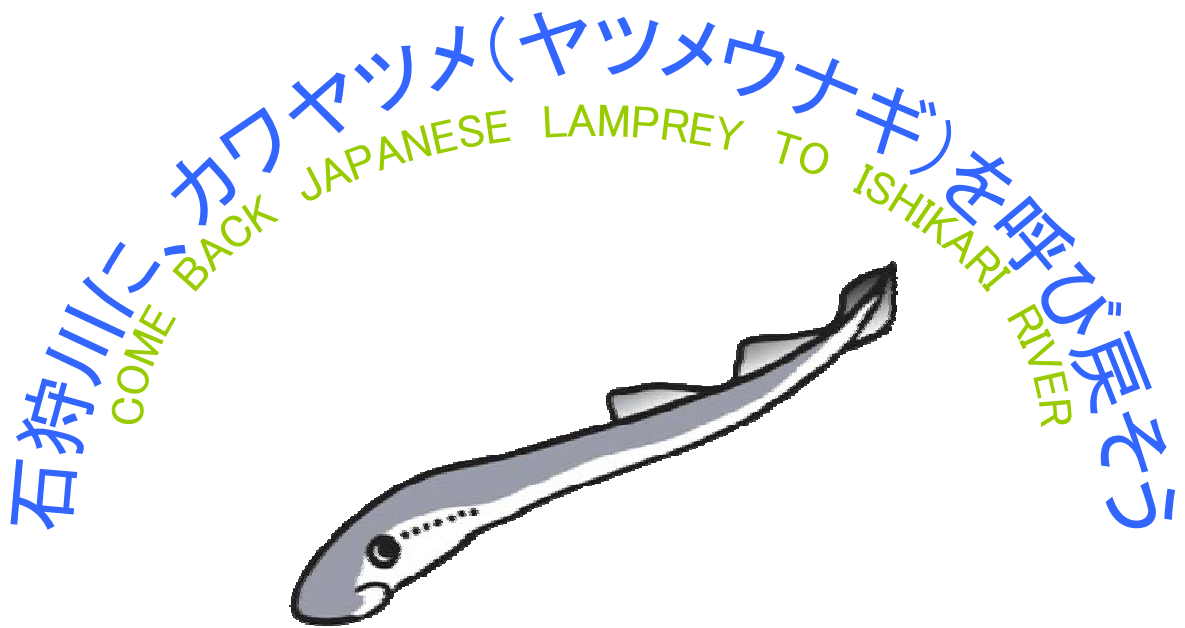
村野紀雄・長津 恵(キャラクター、イラスト)・澤田太郎(イラスト)・八木千尋・小島瑛介・ほか。

執筆・資料協力

北海道水産林務部・北海道立水産孵化場・北海道工業大学環境デザイン学科・流域生態研究所・石狩支庁・空知支庁・北海道開発局石狩開発建設部・北海道栽培漁業振興公社・石狩湾漁業協同組合・江別漁業協同組合・石狩川ヤツメ文化研究会、日本海洋生物研究所・石狩川振興財団・北村義行氏・こじま本店ほか。

お問い合わせ先

北海道石狩支庁産業振興部水産室漁政係・北海道空知支庁産業振興部林務課水産主査



石狩川水系には、たくさんの生物が生息していて、カワヤツメもその一つです。
カワヤツメは、歴史的に見れば、北海道の厳しい開拓時代を栄養の面から支えた重要な食料であり、現在においても、様々な加工品、医療品、料理などに利用されています。
しかし近年、石狩川水系のカワヤツメ資源は急激に減少し、このままではヤツメ資源やカワヤツメを利用した食文化などが失われてしまうかもしれません。